

第146話 山岳信仰

中山町歴史散策

今まで見てきたように、伊勢参詣は、道中日記を見る限り、深い信仰心に裏づけされたものとは言いにくい節があるようです。確かに諸願成就を望んでの旅立ちではありませんが、送り出す戸主の願いは、世間に目を開かせること、あるいは社会的素養を磨き、長旅を通して商売、生活様式、銭の使い方、農耕の技術、食材生産など、あらゆるものを目にしながら、知恵を学ばせるのが主たる狙いで、その名目に伊勢参詣が当てられていたのでしょうか。

さて、今度は、時代を南北朝までにさかのぼります。その頃までには、地方の秀麗な山は神格化され、朝廷はこれに位階勲等を贈って、国を鎮め、庶民の安穩、五穀豊穡などの祈願所としました。格式と朱印地（寺社の飯米地）が与えられ、山頂には、本殿、奥の院、山麓に拝殿が建立されていきました。やがて、数多くの社殿が造られると、一山すべて神域となるものもありました。

出羽一国の秀峰月山は、年を追って位階勲等は昇進し、貞観6年（864年）正四位上勲六等に叙せられ、次いで、貞観18年（876年）正三位勲六等、元慶4年（880年）には正三位勲三等に昇進しました。

山に与えられた位階勲等は、朱印地のように自治権や収入源などを保障されたわけでもなく、奉仕する神官の格付けが評価されるだけでした。やがて、山岳信仰が盛んになると、これが神格の格式となるにつれ、多くの神職が加持祈禱に関わって、強大な勢力を持ち、信仰者を募るようになります。

神格化された山は、御山、御嶽、お山などと崇められ、山に登ることは神のご利益を申し受け、身体堅固、家業繁昌、五穀豊穡、悪魔退散など、あらゆる幸福を授かり、人智の及ばない天災、災難を免れる祈願の場所となっていきました。

※引用 中山町史 中巻
第10章第1節 庶民と信仰

私たち地域おこし協力隊です！ No.13



来てくださった方々、熱心にお話を聴いてくださり、ありがとうございました

皆さんこんにちは。すっかり春めいて、岡の山々にも春の彩りが見られるようになりました。

4月20日に、私たちが開催した「地域おこし協力隊活動報告会」には、想像していた以上にたくさんのお客様に来ていただきありがとうございました。少しでも私たちの活動が伝えられたらいいなと思っています。



(写真左)
桜の花がほんのり綺麗に咲いています



(写真右)
柏倉家住宅の中にある私たちの「発見」を発表させていただきました